明神山名勝調査報告書

2024.8

王寺町

例　言

1. 本調査報告書は、明神山を国登録記念物（名勝地関係）の登録に提案するに際して作成した。

2. 国登録記念物（名勝地関係）の提案では、名称を「明神山（送迎山）」とする。

3. 明神山の評価に関して、平澤毅氏（文化庁文化財第二課主任文化財調査官）、大西貴夫氏（奈良県地域創造部文化財課課長補佐）、本村充保氏（奈良県地域創造部文化財課調整員）に指導・助言を受けた。

4. 本調査報告書の執筆・編集は、岡島永昌（王寺町地域整備部地域交流課主幹兼文化資源活用係長）が担当した。

5. 表紙の写真は、明神山から見た大阪平野・大阪湾（西方面）、裏表紙の写真は、明神山から初日の出を拝む人々（橋本博氏提供）である。

目　次

第１章　明神山とその周辺　4

第１節　地理的環境　4

第２節　自然的環境　8

第３節　歴史的環境　12

第２章　明神山の価値　16

第１節　明神山と地域社会　16

第２節　展望地点としての明神山　20

第３節　名勝地の構成要素　22

第３章　明神山の保存活用　24

第１節　明神山の公園整備　24

第２節　文化財としての取り組み　26

第３節　名勝地としての価値　28

第１章　明神山とその周辺

第１節　地理的環境

生駒・金剛山地

明神山は大阪府と奈良県の府県境近く、奈良県北葛城郡王寺町の南西端に位置している。奈良盆地の西を区画する生駒・金剛山地に属し、大和川を挟んで分かれる両山地のうち金剛山地の北端に当たる。生駒山地の生駒山（標高 642m）、高安山（標高 487.5m）、信貴山（標高 437m）、金剛山地の二上山（標高 517m）、岩橋山（標高 658.6m）、葛城山（標高 959.2m）、金剛山（標高 1,125m）など周辺の山々に比べれば標高が低く、わずか 273.6m である[1]。

標高 273.6m

大和川

明神山の北麓には大和川が流れている。大和川は、奈良県桜井市の初瀬川を源流とし、佐保川、寺川、飛鳥川、曽我川、富雄川、竜田川、葛下川など奈良盆地内のすべての水を集めて盆地を抜け出す。奈良盆地からの水の出口は大和川だけで、明神山北麓の府県境沿岸は「亀の瀬」と呼ばれている。亀の瀬は、川中に亀岩または亀石という亀に似た石があることによる地名とされる。現在の大和川は亀の瀬を抜け出たあと、大阪府柏原市からそのまま西流して大阪湾に注いでいるが、江戸時代の宝永元年（1704）に付け替えられるまでは築留（柏原市役所付近）から北西に流れ、今の長瀬川や玉串川、平野川などに分かれつつ大阪城付近で旧淀川に合流していた。

亀の瀬

四周が山に囲まれる奈良盆地のなかで、盆地を出入りするのに交通上最も利便性の高いのが亀の瀬である。大和川が流れることから山越えを要さないためで、亀の瀬には現在も国道 25 号と JR 関西本線（大和路線）の陸路・鉄路が走っている。亀の瀬を通過する陸路は飛鳥時代の龍田道に始まり、江戸時代の奈良街道（南都街道・大坂街道・堺街道などとも呼ばれる）、国道 25 号につながる明治初年の新街道へと展開していく。

どんづる峯

大阪と大和を結ぶ要路には、香芝市の関屋越え（田尻越えや大坂越えなどとも呼ばれ、現在の国道 165 号に相当）があり、『日本書紀』によれば飛鳥時代から利用されていたことがわかる。付近には「どんづる峯」がある。白色の凝灰岩が木々の間に散在する光景が、鶴がたむろ（屯）するように見えることから屯鶴峯と呼ばれるようになったといい、こうした光景は、千数百万年前の二上山付近の火山活動によって堆積した火砕流や火山灰が、その後の地殻変動で隆起し、浸食されてできあがった。二上山の凝灰岩は良質で加工しやすく、古くは古墳の石棺材や寺院の基壇を装飾する石材として利用された。どんづる峯は、昭和 26 年（1951）に奈良県天然記念物に指定されている。

明神山の山頂は、平成 8 年（1996）に都市公園「明神山自然の森公園」として整備された。住所は奈良県北葛城郡王寺町畠田 2638 番ほかで、大字畠田の山として維持管理されてきた歴史をもつ。畠田は昭和 32 年（1957）に香芝町から王寺町に編入合併し、明治 22 年（1889）に志都美村（昭和 31 年〔1956〕に香芝町となる）として合併するまでは畠田村であった。畠田村には山上垣内、小黒垣内、送迎垣内、尼寺垣内の 4 つの集落があり、このうち尼寺だけは現在香芝市である。村の東寄りに当麻街道（現在の国道 168 号に相当）が縦走し、太神宮灯籠が建つところから明神山に向かって街道が分岐していた。この道は「送迎道」または「送迎越」などと呼ばれ、明神山の北腹を抜けて国分（大阪府柏原市）と通じていた[2]。他にも街道ではないが、山頂から尾根づたいに西へ国分まで通じる道、その途中で南へ分岐して関屋へ抜ける道などがあり、今はハイキング道として利用されている。

畠田村

送迎道

(1)　山の標高は、国土地理院地電子国土 Web による（https://maps.gsi.go.jp/#15/34.574253/135.676861/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1）。

(2)　明神山へ登る道で「山頂まで 460 m」の案内標識が建つところに近世の石造道標が残っており、ここを斜め右に折れると国分へ抜けることができたが、現在は工業団地の私有地に入ることとなり通行できない。

図１）明神山の位置
（国土地理院電子国土 Web の画像を 1/10 万に調整、奈良県地図は縮尺任意）

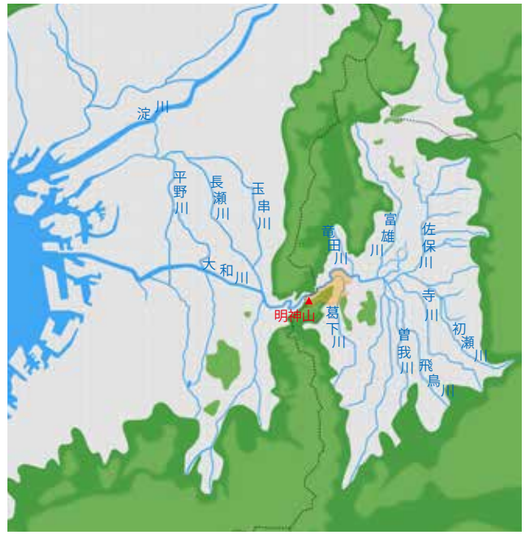


図２）明神山周辺の地勢（縮尺任意）

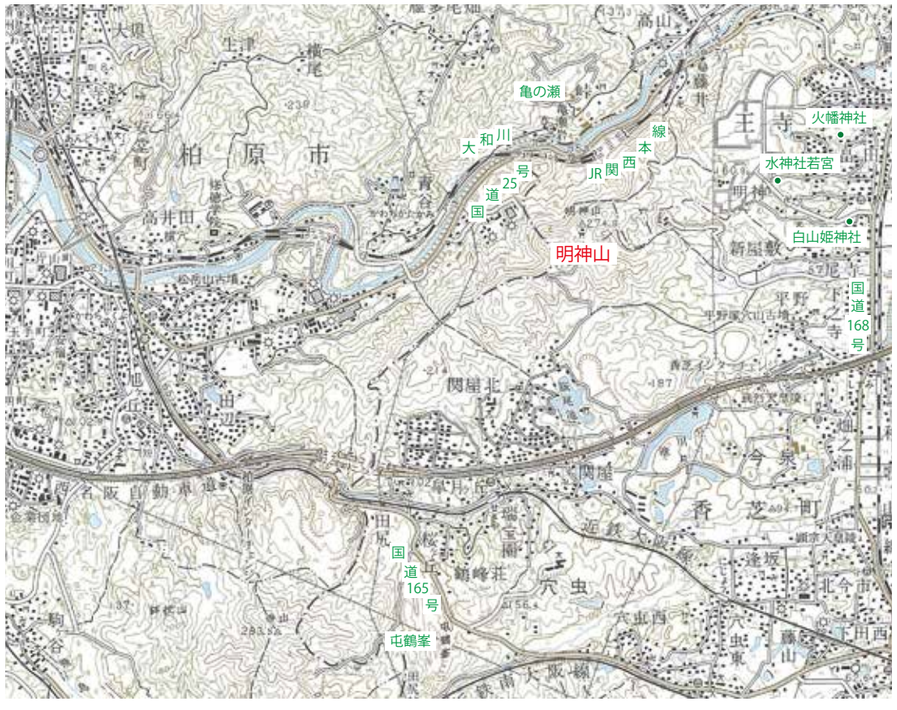


図３）明神山周辺地図（昭和 59 年発行国土地理院 1/5 万地形図「大阪東南部」に加筆して作成）

山頂から香芝市の平野へ下る道、送迎道の途中から王寺町の藤井へ下る道もある。

明神山参道

現在、畠田から国分へ通じる送迎道は、明神山の山頂近くから西の区間が途絶えてしまっているが、当麻街道の分岐点から送迎道のルートと重なる道のりは、「明神山参道」と呼ばれて残っている。参道の名が付くのは山頂に水神社が祀られているためで、明神山という山名もおそらくそれに由来するものと推測される。

水神社

水神社は畠田水利組合によって祭祀されている。拝殿がなくコンクリート造の建屋のなかに小祠がある簡易なもので、明神山自然の森公園の整備の際に新しくされた。水神社は、葛城修験の 28 宿目の経塚であるともいわれ、令和 2 年（2020）に認定された日本遺産「『葛城修験』―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」の構成文化財である。

日本遺産

明神山自然の森公園は、従来から知られていた眺望の良さを、より多くの人が楽しめるよう整備された。広場、展望デッキ、公衆トイレ、遊歩道などを備え、平成 27 年（2015）からは、より眺望が楽しめるよう望遠鏡や景観解説パネル、東屋などが再整備されている。標高が低いながらも全方位にわたって眺望が開け、北方面には信貴山、朝護孫子寺、亀の瀬、生駒山、比叡山、蓬莱山、龍田大社、大和川、松尾山、法隆寺、薬師寺、興福寺、奈良県庁、東大寺、若草山、春日山原始林、続く東方面に龍王山、国見山、馬見丘陵古墳群、三輪山、大神神社、箸墓古墳、高見山、音羽山、竜門岳、耳成山、藤原宮跡、天香具山、畝傍山など奈良盆地が一望できるほか、南方面に大台ケ原、壷阪寺、高取山、山上ケ岳、稲村ケ岳、弥山、八経ケ岳、釈迦ケ岳、葛城山、二上山、金剛山、岩湧山などの山々、さらに西方面には大泉緑地、百舌鳥・古市古墳群、堺市役所、大阪湾、淡路島、明石海峡大橋、六甲山地、神戸市役所、さきしまコスモタワー、港大橋、ユニバーサルスタジオ・ジャパン、あべのハルカスなどまでが確認できる。奈良県内には、龍王山（天理市）や壷阪寺（高取町）のように大阪まで望める眺望ポイントがいくつか存在するが、明神山は生駒・金剛山地に属する立地から奈良盆地と大阪平野の双方が同等の距離にあり、両者とも視認しやすいところに特徴がある。

360 度の眺望

砂防指定地

明神山周辺一帯は、砂防法によって砂防指定地に指定されている。砂防指定地は、砂防設備を要する土地や、治水上砂防のために一定の行為を禁止・制限すべき土地を国土交通大臣が指定するもので、都道府県知事が管理する。奈良県では、指定地内において建築物・工作物の新改築や除却、土地の掘削や盛土・切土など土地の現状を変更する行為、土石や砂の採取、鉱物の採掘、それらの集積や投棄などの行為を行う場合は、奈良県砂防指定地等管理条例によって許可が必要になる [3]。

地すべり防止地区

また、明神山北麓の亀の瀬は、地すべりが発生する地域として知られている。火山活動に起因して形成された粘土層がすべり面となり、規模の大きいものでは昭和 7 年（1932）に発生した。昭和 34 年（1959）に地すべり等防止法にともなって地すべり防止地区として指定され、以後、同 37 年（1962）、同 42 年（1967）、同 43 年（1968）、同 52 年（1977）と指定地区が拡大されている。明神山側では、大和川南岸の王寺町藤井の一部が昭和 43 年（1968）に指定された [4]。地すべり防止地区では、地すべりの発生を助長・誘発するおそれのある行為を行う場合は、砂防指定地と同様に都道府県知事の許可が必要になる。他にも明神山では、森林法による保安林、都市緑地法による緑地保全地区、奈良県自然環境保全条例による明神山景観保全地区などの規制がかかっている。

(3)　図 4 は奈良県土砂災害・防災情報システムの砂防指定地地図から画像を取得した（https://www1.nara-saboinfo.jp/doshamap/Map/Index?mode=Sabo）。

(4)　国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所発行パンフレット『亀の瀬―亀の瀬地すべり対策事業―』による（https://www.kkr.mlit.go.jp/yamato/guide/landslide/library/pdf/kamenose_panf.pdf）。

写真 1）明神山自然の森公園

写真 2）送迎道分岐に残る道標

写真 3）当麻街道と送迎道の分岐点

写真 4）「明神山自然の森公園」の展望デッキ

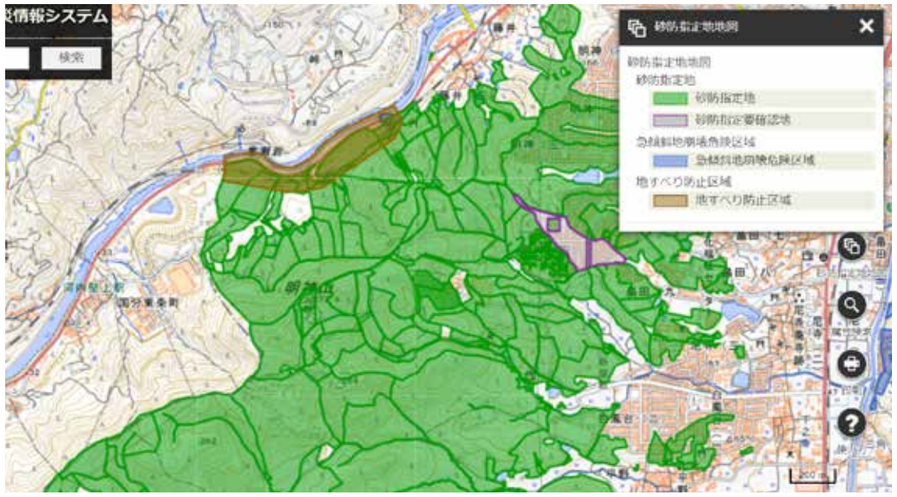


図 4）明神山周辺の砂防指定地と地すべり防止地区（奈良県土砂災害・防災情報システムから画像を取得）

第２節　自然的環境

明神山讃岐岩

王寺町域の地質[5]は、大別すれば領家花崗岩類を基盤とし、そこに明神山讃岐岩と大阪層群が被さって成り立っている。明神山讃岐岩は、1,000 ～ 3,000 万年前に起こった二上山付近の火山活動で何次にもわたって噴出した火山砕屑岩のひとつで、大阪層群はその後、大阪湾が奈良盆地・京都盆地付近まで入り込んだことで生成された砂礫・粘土の海成堆積層である。

サヌカイト

明神山火山岩

明神山の地質は、この明神山讃岐岩からなる。讃岐岩は紫蘇輝石安山岩の一種でサヌカイトと呼ばれ、ガラス質で割れ口が鋭いために石器としてよく利用されたが、明神山の讃岐岩は黒味を帯びた暗色のサヌカイトとは違って、黄味・白味を帯びた明色の安山岩で石器として利用されない。明神山火山岩とも称される。明神山火山岩は、亀の瀬の峠地区（大阪府柏原市）から香芝市の分川池あたりまで、南北約 5km、東西約 4km の範囲で分布している。その他周辺には、同じく二上山付近の火山活動によって堆積した様々な種類の火山岩が分布しており、例えば、上部ドンズルボー層に当たるどんづる峯の凝灰岩がある。

大和川断層

また、明神山北麓の大和川は、20 ～ 30 万年前に大和川断層の活動によって形成された。150 ～ 250 万年前には、奈良盆地に古奈良湖、大阪平野に古大阪湖があって、両湖は関屋（香芝市）付近で通じていたが、100 万年前頃から古奈良湖の陸化が進み、50 万年前頃から激しい地殻変動によって六甲山地や生駒山地が形成され、奈良盆地が沈降し始めると、奈良盆地内を北東から南西にかけてのびる断層群の動きが顕著となった。そのひとつが大和川断層であり、その活動によって生駒・金剛山地に水の出口がつくられ、大和川が形成されて奈良盆地が大和川水系として独立した。今、大和川と葛下川の合流付近から大和川下流の西方を見れば、三郷町・柏原市側の右岸が緩斜面であるのに対して、明神山側の左岸が急斜面になっている。これが大和川断層によって形成された断層崖である。

断層崖

亀の瀬地すべり

この断層崖の対岸に当たるエリアで発生するのが亀の瀬地すべりである。数百万年前に亀の瀬の北にあったドロコロ火山で発生した新旧２回の噴火が原因とされている。１回目の噴火で旧期ドロコロ溶岩が堆積し、ついで礫岩層が堆積。さらに２回目の噴火によって新期ドロコロ溶岩が堆積した。この新旧ドロコロ溶岩に挟まれた礫岩層が高含水性の粘性帯（すべり面）となり、その上の新期ドロコロ溶岩が土塊となってすべり動く。大和川左岸では、大和川断層の活動によって川底から明神山側にかけてすべり面が上昇しており、その関係で亀の瀬地すべりでは大和川の河床隆起が合わせて発生する。

すべり面

アカマツ林

明神山の植生[6]は、 山頂から標高約 80m の山麓までは、主としてアカマツ林・コナラ林からなる自然林と、スギ・ヒノキからなる植栽林に大別される。日当たりの良い山の尾根筋にアカマツ林、谷筋や急傾斜地にコナラ林、緩傾斜地にスギ・ヒノキの植栽林が分布する。これらのうち、かつては明神山の大部分を占めたアカマツ林がほとんど見られなくなっている。燃料革命と化学肥料の普及によって枯枝や落葉が収奪されなくなると、土壌が肥沃化してアカマツの栄養が充足され、新梢がマツノマダラカミキリの産卵場となって、カミキリの体内から線虫が樹幹に入って大繁殖し、松枯れを起こした。急傾斜地は落葉などが堆積しにくいために土壌が肥沃化せず、結果として松枯れの被害は少なかったが、

松枯れ

(5)　地質に関する記述は、王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「地理」の章の「地質」、香芝町史調査委員会編『香芝町史』（香芝町、1976 年）「地理」の章の「地形・地質」、安村俊史『大和川の歴史―土地に刻まれる記憶―』（清文堂出版、2020 年）第１章「大和川のあけぼの」第１節「大和川の誕生」を参考文献とした。

(6)　植生に関する記述は、王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）自然編第２章「植物」第１節「明神山の植生」を参考文献とした。

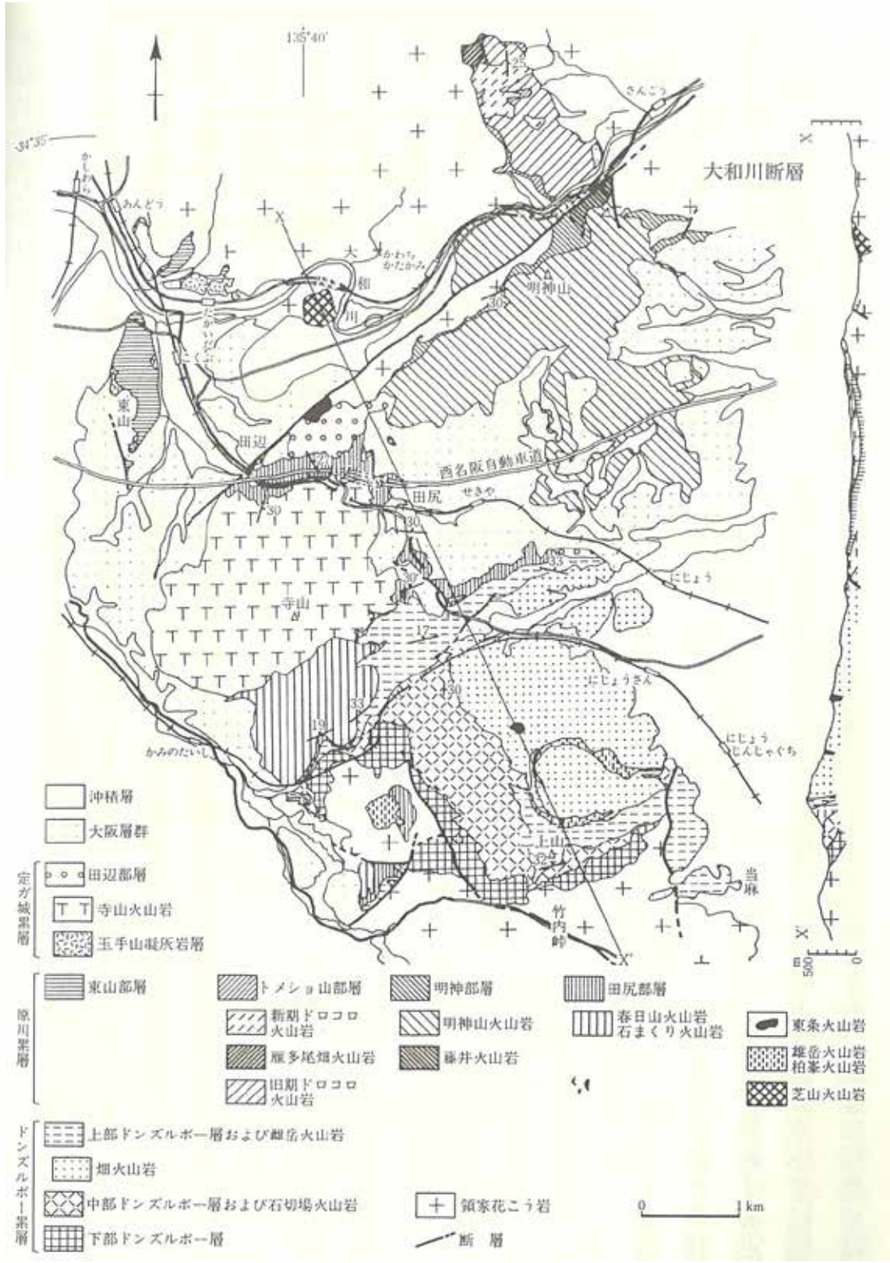


図５）二上山周辺の地質図（安村俊史『大和川の歴史』清文堂出版、2020 年、6 頁の図を転載）

コナラ林

それ以外のところでアカマツ林が減少し、代わってコナラ林の占める範囲が増加した。今となっては、明神山の大部分がアベマキ・コナラ群の植生になっている[7]。

獣類

王寺町域での野生獣類に関して、平成 12 年（2000）に刊行された『新訂王寺町史』では、明神山がある町西部を中心にタヌキ、キツネ、ノウサギ、ムササビが生息すると報告されている[8]。加えて近年は、明神山周辺にかなり多くのイノシシが生息していると見られ、明神山参道の脇にはイノシシが掘った穴が容易に確認でき、王寺町藤井・畠田では作物の被害も出ている。

鳥類

大和川には、広い河川敷もあって冬季にカモ類が多く渡来する。奈良県農林部のガンカモ調査によれば、JR 関西本線の第一大和川橋梁（斑鳩町・河合町）から府県境までの区間で、昭和 62 年（1987）にカモ類が 16 羽であったのが、平成 6 年（1994）に 406 羽、同 10 年（1998）に 523 羽と増加している。種類としてはヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オカヨシガモが多く、カルガモを除いてすべて冬鳥としてシベリア方面から渡来する。カモ類の他には、アオサギ、チュウサギ、アマサギ、コサギ、オイサギ、ダイサギが見られ、丘陵地の鳥としてケリ、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハシブトガラス、コチドリ、ツバメ、ハクセキレイ、ツグミ、カシラダカなどが見られる。ケリは、とくに農耕地で目立つ。現在、チュウサギは「環境省レッドリスト 2019」で準絶滅危惧種に、チュウサギとゴイサギは「奈良県レッドデータブック 2016 改訂版」で希少種に選定されている[9]。

魚類

また、大和川には少なからず魚類が生息している。昭和 10 年（1935）の調査ではスナヤツメ、アユ、ナマズ、ギギ、フナ、コイなど 25 種が確認でき、昭和 44 年（1969）刊行の『王寺町史』では 32 種が報告されている。ただし、この『王寺町史』の頃を境にして大和川の水質汚濁が急激に進み、清冽な水質を好む魚類が次第に姿を消した。昭和 50 年代からは外来種のタイリクバラタナゴ、タウナギ、オオクチバス、ブルーギルなどが入った。平成 12 年（2000）刊行の『新訂王寺町史』では、カワムツ、オイカワ、ウグイ、アブラハヤ、コイ、ゲンゴロウブナ、ドジョウ、ナマズ、オオクチバス、ブルーギル、タウナギ、アユなど 24 種の生息が確認されている。アユは、昭和 25 年（1950）に亀の瀬の石積堤を多数飛び越し、奈良県側にも遡上するのを確認したというが、同 40 年（1965）頃から急激に減少し、同 43 年（1968）からほとんど見られなくなった。『新訂王寺町史』で確認されたアユは、昭和 40 年代に行われた稚魚の放流に関係しているものと予測されている。他にもカワムツやアブラハヤは、大和川の環境から現在も生息している可能性は低いと考えられている[10]。

(7)　アカマツ林からアベマキ・コナラ群への植生変化については、令和元年（2019）認定『王寺町文化財保存活用地域計画』（王寺町、2019 年）第 2 章「王寺町の成り立ち」第 2 節「自然環境」を参照した。
(8)　王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）自然編第 1 章「動物」第 2 節「獣類」。
(9)　鳥類に関する記述は、王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）自然編第 1 章「動物」第 3 節「鳥類」、『王寺町文化財保存活用地域計画』（王寺町、2019 年）第 2 章「王寺町の成り立ち」第 2 節「自然環境」を参照した。
(10)　魚類に関する記述は、王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）自然編第 1 章「動物」第 4 節「魚類」、『王寺町文化財保存活用地域計画』（王寺町、2019 年）第 2 章「王寺町の成り立ち」第 2 節「自然環境」を参照した。

写真５）明神山北斜面の大和川断層崖（大和川と葛下川の合流点付近から西方面を撮影）

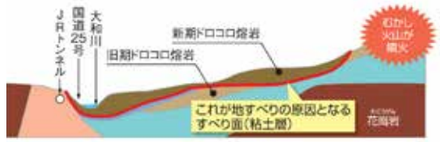
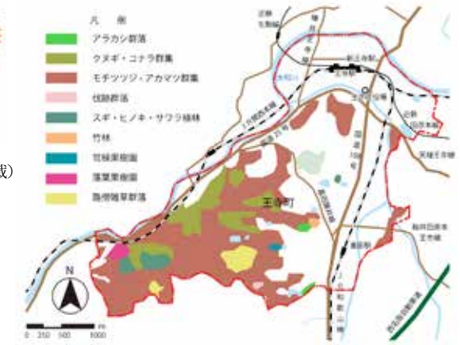


図６）亀の瀬の地質（注 (4) パンフレット 1 頁の図を転載）

写真６）明神山のアカマツ林（上）とコナラ林（下）
（『新訂王寺町史』本文編 650 頁掲載の元写真）



環境省植生調査第 3 回（昭和 58 ～ 61 年度）

同調査第 6 回（平成 11 ～ 16 年度）・第 7 回（平成 17 年度～）

図７）植生の遷移（『王寺町文化財保存活用地域計画』23 頁の図を転載）

第３節　歴史的環境

石器の原材料

二上山付近の火山活動によって生成された火成岩であるサヌカイトは、無斑晶質古銅輝石安山岩と呼ばれ、ガラス質で打ち欠くと鋭利な刃ができることから、打製石器の原材料として利用された。このサヌカイト製石器の原産地遺跡群が、数万年前の後期旧石器時代から 2,000 年前の弥生時代までの長期間にわたって、二上山北麓から西麓にかけて分布している。なかでも、鶴峯荘第 1 地点遺跡（香芝市）からは、7,000 点以上のサヌカイト製石器が出土した土坑が見つかっている。同じく二上山付近の火山活動にともなって生成された凝灰岩は、良質で加工しやすいことから古墳時代には石室や石棺材として、古代の寺院基壇材、古代・中世の石塔材にも利用された。石材の採取地として穴虫石切場遺跡（香芝市）、高山石切場遺跡（香芝市）、二上山雌岳の石切場遺跡（大阪府太子町）などが知られている [11]。

凝灰岩石切場

畠田古墳

明神山付近の古墳に畠田古墳がある。径 15m、高さ 4m 以上の円墳で、全長 5.9m の横穴式石室をもつ。石室から出土した須恵器によって 7 世紀初頭に築造されたと考えられている。石室を構築する石材として多量に使用されるのが輝石安山岩で、明神山で採石されたと推定されている。ただし、石材の形と表面の様子から川原や地表に点在したものを採取しており、切り出されたものではない [12]。香芝市の今泉古墳も径 15m、高さ 3m の円墳、全長 6.15m の横穴式石室をもつ畠田古墳と同規模の古墳で、石室材にも同じく明神山付近の安山岩が使用されている [13]。7 世紀後半から末頃に築造され、一辺 18m の方墳である平野塚穴山古墳（香芝市）は、横口式石槨に二上山で産出される凝灰岩が使用されている [14]。また、鎌倉時代にまで下るが、達磨寺本堂地下から出土した宝篋印塔形の石塔も二上山産出の凝灰岩でつくられている [15]。

明神山安山岩の石室

二上山の凝灰岩

飛鳥時代になると、明神山北麓の亀の瀬と南麓の関屋（田尻・大坂）が難波と大和を結ぶ要路として利用されたことが確認できる。北麓は龍田道、南麓は大坂道と呼ばれる。龍田道は、聖徳太子が斑鳩と河内を往来するのに利用されたと伝わり、13 世紀前半に法隆寺僧顕真が著した『古今目録抄』（聖徳太子伝私記ともいう）では、法隆寺から四天王寺に至る「椎坂」で太子が笛を吹いていると、山の神が感動して舞ったといい、雅楽の蘇莫者はこれに由来するという。

龍田道・大坂道

推古天皇 13 年（605）に聖徳太子が斑鳩宮に遷宮したのち、宮に合わせて斑鳩寺（法隆寺若草伽藍跡）を建立したのを皮切りに、7 世紀末にかけて平隆寺（三郷町）、西安寺（王寺町）、片岡王寺（王寺町）、尼寺北廃寺・南廃寺（香芝市）、中宮寺（斑鳩町）などと大和川沿岸に数多くの初期仏教寺院が創建された。西安寺跡では、金堂・塔の基壇装飾に使用されたと考えられる二上山産の凝灰岩が出土している [16]。また、『日本書紀』では、天武天皇元年（672）に起こった壬申の乱において、龍田道と大坂道が利用されていることがわかり、天武天皇 8 年（679）11 月には竜田山と大坂山に関が設置された。

大和川沿岸の飛鳥時代寺院

(11)　サヌカイト・凝灰岩に関する記述は、香芝市二上山博物館の展示に関するサイトを参照した（https://www.city.kashiba.lg.jp/soshiki/42/3503.html）。
(12)　奈良県立橿原考古学研究所編『畠田古墳』王寺町文化財調査報告書第 1 集、王寺町、1998 年。
(13)　香芝町史調査委員会編『香芝町史』（香芝町、1976 年）「歴史」の章の「古墳時代」。
(14)　香芝市教育委員会編パンフレット『国指定史跡平野塚穴山古墳―香芝市平野塚穴山古墳史跡公園（奈良県香芝市平野）』香芝市教育委員会、2020 年。
(15)　王寺町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編『達磨寺発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 4 集、王寺町、2004 年。
(16)　王寺町編『西安寺跡発掘調査報告書―舟戸神社境内編―』王寺町文化財調査報告書第 19 集、王寺町、2023 年。

図８）明神山周辺の遺跡（昭和 59 年発行国土地理院 1/5 万地形図「大阪東南部」を 50％にし、加筆して作成）

写真７）二上山麓のサヌカイト（王寺町所蔵）

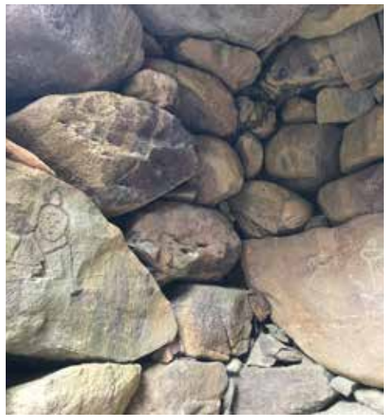


写真８）明神山安山岩の畠田古墳石室

写真９）畠田古墳（奈良県指定史跡）

写真 10）西安寺跡（奈良県指定史跡）写真は塔跡完掘状況

写真 11）二上山産の凝灰岩でつくられた達磨寺出土石塔（奈良県指定有形文化財）

聖徳太子葬送の道

聖徳太子が生前から自らの墓を築き、たびたび視察に訪れ、かつ、薨去後に遺体が葬送されたとされる道に「聖徳太子葬送の道」（たんに太子道ともいう）がある。一般には斑鳩町の龍田神社で奈良街道と分岐する当麻街道から穴虫峠を経由して磯長（大阪府太子町）に出たと理解されているが、聖徳太子は明神山の北腹を越える送迎道を通っていたとする伝承も残っている。送迎という地名には、聖徳太子を送迎したことが関係しているのだという [17]。送迎道は、近世には存在したことが絵図や史料などから確認できるが、それよりも遡るかどうかは不明である。

葛城修験

龍田道や大坂道、送迎道は生駒・金剛山地を横断する道であるが、縦断する道もあった。それが葛城修験である。葛城修験は、役行者が吉野大峯よりも先に開いたという総延長 112km にもおよぶ修験の道で、役行者が法華経 28 品を埋納したという 28 の経塚を巡拝する。第 1 番経塚が和歌山県の友ケ島で、そこから和泉山脈、金剛山地を縦走し、第 28 番経塚とされる明神山の水神社で結願となる。ただし、第 28 番経塚に関しては、明神山ではなくて亀の瀬だとする説が有力であるが、葛城修験のルートが明神山を経由したことには違いないだろう。葛城修験が役行者によって開かれ、法華経が埋納されたことを史実として考えるのは難しいが、葛城修験が平安時代に行われていたらしいことは『諸山縁起』などからうかがえる [18]。

信貴山城

送迎山城

片岡城

七郷山城

明神山周辺が大阪と大和を結ぶ要路であることは、戦国時代になっても変わらない。大和川を挟んで明神山の北にある信貴山の山頂には木沢長政によって築城された信貴山城があったが、三好勢として大和を攻めてきた松永久秀が永禄 2 年（1559）に改修して拠点とした [19]。雄岳の山頂からは河内国と大和国の双方が良く眺望でき、明神山も見ることができる。また、明神山から谷を挟んだ南に送迎山城跡がある。「でまる山」（出丸山）、「本丸」（ほんまろ）、「出陣」（でんまろ）の呼び名が伝わるところに遺構が展開する。片岡氏が片岡城（上牧町）を築くまでの本城、松永久秀らが片岡城の片岡氏を攻めた際に在陣した城などとする考えがあるがはっきりしない。送迎山城跡から西約 1km のところには、松永久秀が陣城にしたとも考えられる七郷山城跡がある。小規模ながら、尾根沿いの国分越ルート上に主郭・土塁・堀などが配置され、遺構が良好に残っている [20]。

剣先船・魚梁船

荷継問屋

明治新街道

亀瀬隧道

江戸時代になると、亀の瀬が大和川舟運による物流拠点となった。亀の瀬を境にして大坂側に剣先船、大和側に魚梁船が就航し、主として大坂から大和へ肥料が運ばれた。亀の瀬には剣先船の荷を扱う藤井問屋や峠問屋、魚梁荷場と呼ばれる荷継問屋があった。寛政 3 年（1791）に刊行された『大和名所図会』では、挿絵に藤井問屋が描かれ、その後方に明神山系が見えている [21]。明治 5 年（1872）からは、奈良街道を拡幅する意味で大和川の南岸に新街道が開削され、同 25 年（1892）には亀瀬隧道が完成して大阪鉄道湊町・奈良間が全通し、鉄路も開かれた。大和川舟運は、鉄道の開通とともにその役割を終えたものと考えられる。亀の瀬では、昭和 6 年（1931）末から翌 7 年に大規模な地すべりが発生した。このときに亀瀬隧道が崩壊し、迂回新線が敷設されて現在に至っている。龍田道を軸とする亀の瀬周辺は、「もう、すべらせない!!～龍田古道の心臓部「亀の瀬」を越えてゆけ～」の名称で日本遺産に認定されている。

(17)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「伝説」。
(18)　葛城修験日本遺産活用推進協議会編『日本遺産葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地構成文化財調査報告書』葛城修験日本遺産活用推進協議会、2023 年。
(19)　奈良県歴史文化資源データベース「いかす・なら」の信貴山城の項（https://www.pref.nara.jp/miryoku/ikasu-nara/naranoshiro/shigisanjo/）。
(20)　送迎山城跡と七郷山城については、『奈良県中近世城館跡調査報告書―第二分冊―』（奈良県、2021 年）を参照した。
(21)　大和川舟運については、王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）大和川水運編などを参照した。

写真 12）信貴山雄岳山頂からみた明神山方面

写真 13）問屋場のあった亀の瀬

写真 14）『大和名所図会』に描かれた藤井問屋（後方の山が明神山系）

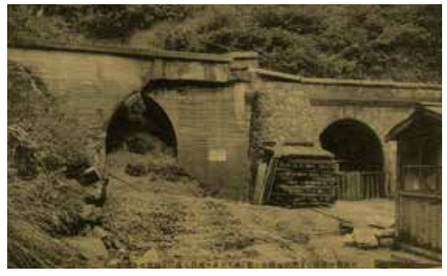


写真 15）崩壊した亀瀬隧道（柏原市立歴史資料館所蔵）

写真 16）地すべりの迂回路線（後方の山が明神山）

第１節　明神山と地域社会

送迎山・西山

明神山は、近世村でいうところの畠田村領にあり、当時は明神山ではなく送迎山・西山と呼ばれていた[22]。送迎山は送迎道が通り、付近が畠田村のうち送迎垣内の領域であったことからそう呼ばれていたと判断でき、西山は畠田村の集落が明神山の東麓にあり、集落から見て西にある山だからそう呼ばれたと想像できる。明神山は近代以降の山名であり、明治 41 年（1908）測量・同 44 年（1911）発行の陸地測量部地形図に「明神山」と注記されている。山頂に祀られる水神社に由来して、その名が付いたと考えられる。

水神社

カンゴ池

水神社は、明治 26 年（1893）「神社明細帳」[23] によれば罔象女命、同 35 年（1902）「神社由緒調綴」[24] によれば水分大神を祭神としている。現在は畠田水利組合によって管理・祭祀されており、祭神や管理主体からも水信仰に基づいて勧請されたと考えられる。現在の明神山参道はコンクリート舗装されているが、側溝がカンゴ上池に接続されていて、実質的に明神山が水をもたらす山になっている。カンゴ池が築造されたのは文政元年（1818）であるので[25]、水神社もその頃に、池の築造にともなって創立されたと考えられる。今も田植え前のツユハリ（通井張り）では、明神山参道の側溝が清掃されている。

八朔

このように明神山は、水をめぐって畠田の地域社会と深く関わってきた。水神社での「八朔」は現在も畠田水利組合によって続けられている。八朔とは、８月の朔日に田の実りを祝って新米を贈答した風習にもとづくもので、今は旧暦に合わせて９月１日に行われている。かつてはお神酒やこんにゃくなどを持って明神山に登り、水神さんにお供えしてお祈りしたあと、畠田のみんなが山頂広場に集まってお酒やご馳走をよばれた[26]。

雨乞い

ナモデ踊り

また、かつては畠田の火幡神社で雨乞いしても雨が降らなかった場合、畠田の人が総出で明神山に登り、心経を上げてシバを寄せて火を焚き、「雨タンモレ」と唱えたという。いわゆる千駄焚きの行事で、雨乞いとして 300kg もある太鼓台を山頂まで担ぎ上げることもあった。それでも雨が降らなければ、ナモデ踊りが奉納された。ナモデ踊りは、江戸時代から明治時代にかけて奈良盆地各地で踊られた太鼓踊りのひとつで、畠田では村内の様々な場所を踊りめぐっており、西山の水神社でも踊られた。畠田ではナモデ踊りをして雨が降らなかったことはないそうで、大正末期に行われたのが最後である[27]。

若宮

水神社には、送迎道（明神山参道）沿いに若宮と呼ばれる分社が畠田の集落近くに祀られており、今は３年に一度になっているが、秋祭りの太鼓台引出の際に立ち寄って神事が営まれる。

松茸狩り

かつてアカマツ林が多くを占めていた明神山は、植生に関しても地域社会と関わっていた。このことは「…行楽乃秋…松茸狩は王寺駅附近の送迎山へ」と書かれたチラシからうかがえる[28]。チラシでは、10 月 10 日から 10 月 31 日までは王寺駅から送迎山のある畠田まで臨時バスが増発され、湊町（JR 難波）や天王寺から指定列車に乗れば汽車賃が２割引になることが広告されている。明神山で松茸狩りが行われていて、交通機関を巻き込んだ旅行企画まで展開されていた。チラシには、松茸のすき焼

(22)　文政 13 年（1830）のおかげ参りにともない明神山の山頂に建立された「和州送迎太神宮しんぱんはやりうた」（『新訂王寺町史』資料編〔王寺町、2000 年〕593 ～ 594 頁）による。
(23)　明治 24 ～ 27 年「北葛城郡神社明細帳」（奈良県立図書情報館所蔵奈良県庁文書 1-M24-85d）所収。
(24)　明治 35 年「北葛城郡祭神由緒調綴」（奈良県立図書情報館所蔵奈良県庁文書 1-M35-41）所収。
(25)　王寺町水利史編集委員会編『王寺町水利史』（王寺町土地改良推進協議会、2009 年）歴史編第２章第２節「畠田村での新池の築造」の項目。
(26)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「畠田」。
(27)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「畠田」。
(28)　王寺町畠田の個人所蔵。王寺町では、チラシを写真撮影したデータを保有している。

図９）明治 44 年発行陸地測量部地形図
（国土地理院 1/2 万「古市」を 50％にして作成）

写真 17）明神山参道のツユハリ（平成 19 年）

写真 18）水神社の八朔（平成 10 年）

写真 20）松茸狩りのチラシ

写真 19）若宮への太鼓台引出（平成 30 年）

きや松茸ご飯などからなる「お山の定食」が記載され、明神山の山麓が松茸狩りの人々でにぎわう様子が目に浮かぶ。チラシの年代は、左下に「昭和十三年前後の価格」と手書きされているのが参考になる。畠田に住む人の話では、昭和 30 年代まで明神山で松茸が採れていたといい、リヤカーにカンテキ（七輪）を積んで山に登ったという。松茸は、周辺の平群町や生駒市の山でも採れていた。

送迎太神宮
おかげ参り

江戸時代の一時期、明神山の山頂に送迎太神宮が建立されたことがある。文政 13 年（1830）３月、数十万から数百万もの人々がこぞって伊勢に参宮する「おかげ参り」が阿波国から起こり始めると、４月には明神山を指すと推測される「無文寺」という山に御札と御幣が降り、段々と参詣する人が出たので、山を開いて太神宮の本社を建立し、同じ年の冬には完成して参詣が続いた。そして、そこには「太神宮」と書き付けられた状態で山から掘り出された石が立てられていて、そこを元伊勢として伊勢の太神宮が大和から国替えなさったといって信心していると記録されている [29]。また、別の記録では、西山に伊勢太神宮がお出でなされたとして参詣者が徐々に増加したので、郡山藩に社の造営を願い出たところ９月に許可されたといい [30]、畠田村に御札と御幣が降ったというので各地から参詣があったため、送迎太神宮と呼ぶ内宮、亀山太神宮と呼ぶ外宮が建立され、大阪からは石鳥居、大和各地からは馬が寄付された。さらには宇治橋や天岩戸もつくられて、畠田は連日の参詣者で大繁盛し、茶屋や万金丹屋までつくられた。その後も社の維持管理が図られていたが、天保２年（1831）５月に郡山藩主の命で送迎・亀山両神宮が焼き捨てられ、およそ１年ほどの畠田参りであったとする記録もある [31]。焼き捨てに関して昭和 44 年（1969）刊行の『王寺町史』では、郡山藩主が馬に乗ってきて、これはニセの皇太神宮で白狐が武士に化けたというので、命を下して取り壊してしまったという伝説が記録されている [32]。

和州送迎太神宮之図

送迎太神宮の参詣者に配布したと考えられるのが、送迎社勧進所発行の「和州送迎太神宮之図」である [33]。文政のおかげ参りにともない明神山の山頂に建立された送迎太神宮を描いた絵図で、山頂に「御本宮」や「舞殿」が建てられ、「太神宮」の幟が立つ建物で休んでいる人々も見える。参道に鳥居や灯籠が奉納されているほか、金剛山・葛城山・二上山をはじめ、乳垂地蔵や永福寺、信貴山、大和川、亀石など周辺の社寺や山などが名所として描き込まれている。現在は、明神山の山頂一帯が公園開発されていることもあり、目に見える送迎太神宮に関する遺構はないが、火幡神社に石灯籠、白山姫神社に鳥居と道標（石段に転用）が残っている。本来は、送迎太神宮の奉納品であったのが、焼き捨てられたのちに移転された。すでに建て替えられているが、火幡神社の拝殿も送迎太神宮のものが移築されていたという。

送迎太神宮の遺品

送迎の地名伝承

天理大学附属天理図書館に近世のものと考えられる「和州葛（下脱）郡畠田村領内絵図」が所蔵されている。絵図には「当麻法隆寺道」と「大阪道」が描かれる。大阪道とは送迎道に接続する道である。送迎の地名は、聖徳太子が河内から法隆寺へ通ったときに両方から送り迎えをし、昼飯の時間になったために送迎と書いてヒルメと読むのだという伝承がある [34]。現在、聖徳太子が通った太子葬送の道（太子道）は当麻街道から穴虫（香芝市）を抜けたと考えられているが、かつて畠田では聖徳太子が送迎道を通ったとした。絵図の送迎道ルート上、藤井へ下る追分のところに「聖徳太子マナイタ石」と「聖徳太子小便石」が見える。現在、これらの石はないが、ここで聖徳太子を接待したと伝えられていたのだろう。

聖徳太子マナイタ石・小便石

(29)　桑海村（葛城市）の「諸事記録帳」（王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』資料編〔王寺町、2000 年〕592 頁）。
(30)　山之坊村（橿原市）の「古記帳」（王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』資料編〔王寺町、2000 年〕591 ～ 592 頁）。
(31)　福知堂村（天理市）の「手覚年代記」（王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』資料編〔王寺町、2000 年〕593 頁）。
(32)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「伝説」。
(33)　摺物で天理大学附属天理図書館と大阪大学日本史研究室に所蔵されていることが確認できている。
(34)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「伝説」。

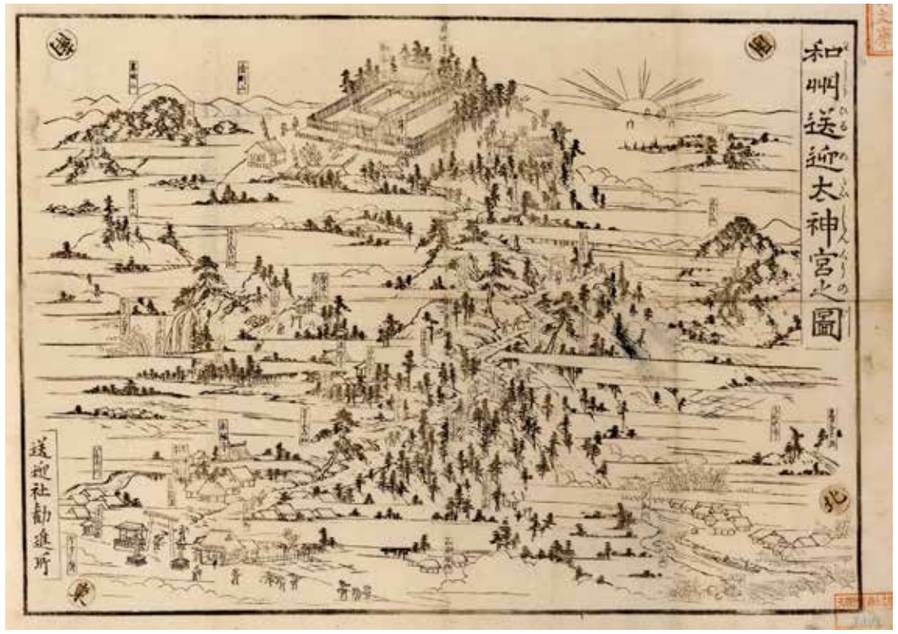


写真 21）和州送迎太神宮之図（天理大学附属天理図書館所蔵）

写真 22）火幡神社に移転された石灯籠

写真 23）白山姫神社石段に転用された道標

写真 24）送迎太神宮移築の火幡神社旧拝殿

写真 25）送迎道に描かれる「聖徳太子小便石」と「聖徳太子マナイタ石」
（天理大学附属天理図書館所蔵）

第２節　展望地点としての明神山

和州送迎太神宮之図

現在、多くの人に親しまれている明神山の眺望は、古くは江戸時代に認識されていたことがうかがえる。文政 13 年（1830）のおかげ参りにともなって明神山の山頂に建立された送迎太神宮では、「和州送迎太神宮之図」が発行された。この絵図では、御本宮や舞殿がある山頂が広場状になっており、広場北寄りのところで遠方を指さすなどして眺望していると見られる人が９人描かれている。西を見る人の先には「住よし」（住吉）があり、堺に寄港する船や大阪湾で帆を張る船も描かれる。さらにその先には夕日が表現され、その左右に山並みが確認できる。これを現在の眺望と比較するならば、夕日が沈むのは明石海峡で、右手の山並みが六甲山地、左手が淡路島と判断できる。明神山から見て明石海峡に日が沈むのは、現在の暦でいえば９月 10 日頃である。また、北を見る人の視線の先には、これも現代の眺望と比較するならば、「しき山」（信貴山）や「かめせ峠」（亀瀬峠）があったものと推定される。このことからすると、「二上嶽」「葛城山」「金剛山」も文政 13 年（1830）当時にも明神山から眺望できたからこそ、絵図に配置されているのであろう。絵図の山頂広場南寄りでは、それらを眺望する人も確認できる。

大阪湾・明石海峡

信貴山・亀の瀬

二上山・葛城山

明神山の眺望が、古くから親しまれていたことが文学的な面からも確認できる史料が２点ある。その１つが「送迎名所」である[35]。これは、作成年代を欠いているが、送迎太神宮の建立にともなって付近の名所が歌われていて、文政 13 年（1830）頃のものであることがわかる。そこでは「送迎八景名所調らへ」として「くりやの社」（厨社）、「朝日の峰」、「豆山」、「山の神垣内」（山上垣内）、「雲石」、「小便石」、「祓懸の松」、「大和川のいなふね」（魚梁船）に追加するかたちで、「かめ山や西をはるかにみわたせハ、なにはすみよしあわしのしまや」などと歌われている。送迎太神宮のあった明神山山頂から西を遙かに見渡せば、難波・住吉・淡路島が見えていた。

送迎名所

送迎八景名所調べ

２つ目は、大正２年（1913）の「南無手拍子本并ニなむで哥」である[36]。これは火幡神社氏子の松本阪三郎が記したもので、三男の音次郎が写したものと考えられる。ここには、まずナモデ踊りの太鼓拍子が「てんてんつくつく」というように表現されたのち、「雨乞成就の哥」「火幡神社鳥居前ニテ」「氏神前ニテ下向ニ御礼踊り之哥」「字西山水神社ニおゐて」「白山姫社之神前ニおゐて」「厨神社ニおゐて」「所望を断り之哥」「宿より出立之踊之哥」「尼寺薬師寺お土山ニて」「以前村庄屋宅ニおゐて」「以前郷蔵ニおゐて」「元製札場ニて」などと各所で踊り歌う 14 首が示されている。このうち明神山（西山）の水神社で踊り歌われるのが、「爰ハ名高ひ鎮守のやしろ、東三輪山、南ハ二上、北は生駒の西淡路島、なにハのみなとへ入船・出舟、おもしろやの、おもしろやの、なにより此山おもしろ」である。当時も水神社から東を見れば三輪山が、そして南に二上山、北に生駒、西に淡路島が眺望できたのであり、大阪の港へ出入りする船も見え、このことがとても興味深いと歌われている。なお、昭和 44 年（1969）刊行の『王寺町史』では、ここに紹介したのとは別に、明治 42 年（1909）に山上の松本安吉が写した「南無手拍子本并ニなむで哥」が残っているとして同じ 14 首を示している[37]。

南無手拍子本并ニなむで哥

こうして、近世の絵図や近世・近代の歌にも表現されてきた明神山の眺望は、昭和 40 年代からの東麓の住宅地開発においても維持され、平成８年（1996）の明神山自然の森公園の整備へとつながっていった。

(35)　王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』資料編（王寺町、2000 年）911 ～ 913 頁。
(36)　原本の所在は確認できていないが、王寺町でコピー版を保有している。
(37)　王寺町史編集委員会編『王寺町史』（王寺町、1969 年）「民俗」の章の「畠田」、628 ～ 631 頁。

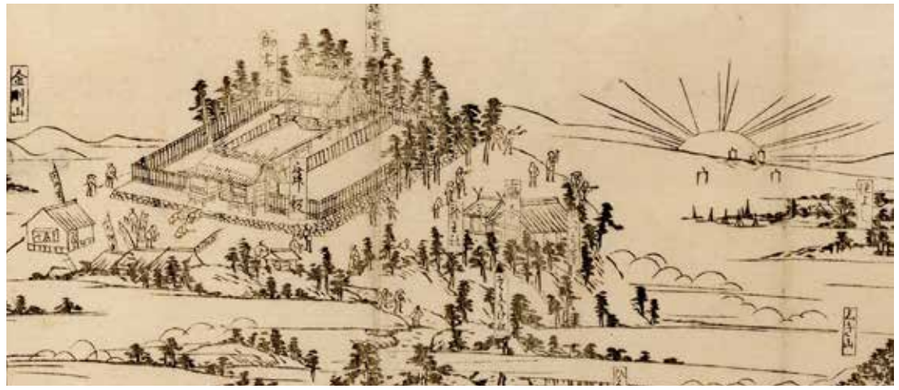


写真 26）「和州送迎太神宮之図」に描かれる明神山の山頂から眺望を楽しむ人々

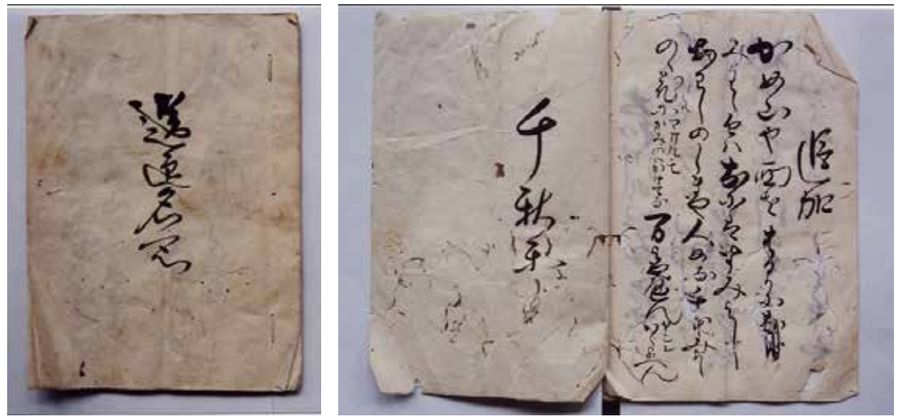


写真 27）「送迎名所」に見える明神山の眺望の歌

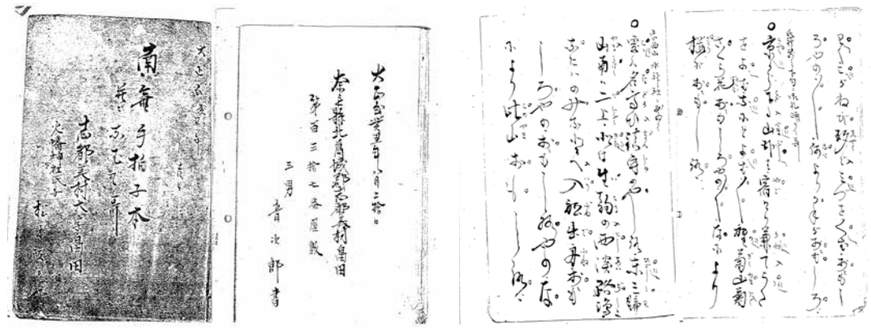


写真 28）大正２年「南無手拍子本并ニなむて哥」の表紙と明神山の眺望を歌った部分

第３節　名勝地の構成要素

ここまでのところで、明神山の地理的・自然的・歴史的環境を周辺も含めて確認し、明神山と地域社会の関わり、また、明神山が古くから展望地点として認知されていたことを見てきた。ここで、明神山を名勝地として評価していくにあたり、その構成要素となるものを３つに分けて整理しておきたい。

明神山からの眺望

まず１つ目の要素となるのが明神山からの眺望である。

明神山は、大和川断層の活動によって生じた断層崖の南にあって、奈良盆地の西を区画する生駒・金剛山地に属している。標高 273.6m と低い山ながら全方位にわたって眺望が開け、東には奈良盆地全体が見渡せる。北には生駒山地、南には金剛山地の山並みが見え、西には大阪平野から大阪湾、明石海峡までを望むことができる。とくに東の奈良盆地方面では、西を区画する生駒・金剛山地の他にも、北を区画する平城山丘陵、東を区画する大和高原の山々、南を区画する大峰山脈、盆地西辺に位置する矢田丘陵、馬見丘陵を見ることができ、これら山地の隆起と浸食、浸食時の土砂の堆積などによって盆地が形成された自然の営為を見ることができる。

展望地点としての明神山

そして、そうした営為の展望地点として古くから観賞されていたことが、名勝地としての明神山を構成する２つ目の要素である。

明神山が展望地点になっていたことが知られる最も古い事例は、文政 13 年（1830）のおかげ参りにともなって山頂に建立された送迎太神宮で、江戸時代後期のことである。参詣者に配布されたと考えられる「和州送迎太神宮之図」には、山頂から遠くを指さしながら景観を楽しむ人々の姿が多く描かれ、その視線の先には、西に住吉、堺、大阪湾、明石海峡、北に信貴山、亀の瀬、南に二上山、葛城山があった。絵図に描き込まれるこれらの風景は、明神山の山頂から眺望できる名所として理解され、絵図に配置されたと考えられる。そして、こうした眺望は、「送迎八景名所」として歌われたものに追加され、「かめ山や西をはるかにみわたせハ、なにはすみよしあわしのしまや」と明神山から遙かに見渡せる難波・住吉・淡路島の美しさが表現された。海のない大和国（奈良県）から大阪湾が望めることの喜びが反映されているように感じられる。明治・大正の時代になっても明神山は国土美が観賞できる展望地点としてあり続け、畠田のナモデ踊りでは、明神山の鎮守社（水神社）から東に三輪山、南に二上山、北に生駒山、西に淡路島、それに難波に出入りする船が見えることが歌われている。

明神山と人との関わり

そして、３つ目の構成要素としてあげておきたいのが明神山と人の関わりである。

奈良盆地や大阪平野、大阪湾、明石海峡などが望める展望地点として観賞されるには、明神山に人々が立ち入らなければならない。そのことが史料から明らかになる最古例が文政 13 年（1830）であることは先に述べた。ただし、その少し前の文政元年（1818）には、新しくカンゴ池が築造されたことを契機にして明神山に水神社が勧請されたと考えられ、以来、畠田の人々によって雨乞いや収穫を祝う神事が続けられている。昭和の燃料革命までは、人々が明神山に入って薪や下草を得たばかりか、松茸狩りも行っていた。人々による継続的な関わりもまた明神山を名勝地として評価するうえで欠かせない。このように考えてくると、明神山と人々の関わりは何も江戸時代に始まったことではなく、古墳時代には明神山から古墳石室の材料を得ていたし、古代・中世には葛城修験の巡拝で多くの修験者が明神山を行き来した。彼らもまた明神山からの眺望を楽しんだであろうし、聖徳太子が実際に通ったかは別にしても、送迎道を行き交う人々も明神山から展望することがあっただろうと推測できる。

（北方面）

（東方面）

（南方面）

（西方面）

写真 29）明神山からの眺望（景観説明パネル）

写真 30）明神山から奈良盆地を望む（東方面）

写真 31）明神山から二上山・葛城山、大峰山脈方面を望む（南方面）

第１節　明神山の公園整備

美しヶ丘の開発

かつて送迎山と呼ばれて松茸狩りが行われるなどした明神山の東麓は、現在、王寺町太子１～３丁目、明神１～４丁目の住宅地になっている。美しヶ丘（うつくしがおか）と名づけられた住宅地は、昭和 52 年（1977）に開発許可申請が提出されたことに始まり、同 57 年（1982）の最終計画案では 1,437 戸、5,752 人の大規模住宅地となって入居が始まった[38]。

この開発によって大きく変化したのが、送迎道と呼ばれ、明神山参道として山頂の水神社への参詣路として利用されたルートである。水神社の分社である若宮の付近から中高区配水池が設けられているあたりまでは、住宅地として開発されたためにそれまでのルートが失われた。現在、住宅地内には「明神山参道」と刻まれた標柱が随所に見え、大きな鳥居もあるが、これは畠田の人々が参道を残そうと住宅開発業者に依頼して建立された。山頂までのルートがコンクリート舗装されたのもこのときで、水神社の維持管理や太鼓台を山頂に引き上げるのに便利なように、これも開発業者によって行われた。

標柱・鳥居

コンクリート舗装

都市公園

明神山の山頂に都市公園の「明神山自然の森公園」が完成したのは、平成８年（1996）である。王寺町大字畠田 2638、2639、2640、2641、2644、2645 番地の６筆を公園の範囲とし、公園内に休憩舎、展望デッキ３基、便所が備えられた。水神社は公園内の占有物件になっている。

公園再整備

この公園整備によって、町内外のより幅広い人々が明神山の山頂を訪れるようになり、同時に優れた展望地点としての認識も広まっていったが、現在のように年間約６万人が訪れるようになるのは[39]、奈良県植栽計画に基づく指定により雑木などが大規模に剪定されたことと、「明神山修景整備デザイン計画」に基づく再整備を契機としている。再整備では、望遠鏡や解説パネル、解説板、東屋、桟敷デッキ、トイレ改修、それに、海のない奈良県から海を見て愛を誓う「悠久の鐘」などが充実した。平成 28 年（2016）度には、「明神山自然の森公園展望デッキ」が奈良県景観資産に登録されている。令和２年（2020）度には、都市公園に王寺町大字畠田 2642、2643、2646 番の３筆が新たに追加されている。明神山自然の森公園の眺望環境が整えられることで、展望地点としての明神山が保存・活用され、その価値は高まっている。

(38)　王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編（王寺町、2000 年）地理編第５章「住宅地開発と人口の推移」第１節「低地から高地へ進む住宅地開発」の「第二期の住宅地開発」の項。
(39)　入山者計数器を設置してからの年間訪問者数は、令和元年が 71,242 人、令和２年が 111,069 人、令和３年が 76,031 人、令和４年が 70,899 人、令和５年が 57,546 人で推移している。

表１）明神山自然の森公園の再整備

年度	整備内容	年度	整備内容
平成 27 年度	望遠鏡	平成 29 年度	明神山解説看板
	防犯カメラ		東屋周辺樹木伐採
	東屋	平成 30 年度	入山者計数器
平成 28 年度	悠久の鐘展望テラス		東屋改修
	解説パネル		桟敷デッキ
	雪丸願い札掛け所		トイレ改修
	十国国見台解説板	平成 31 年度	桟敷デッキ
	防災無線		奈良側デッキ眺望確保
	ライブカメラ・無料 Wi-Fi		外周遊歩道樹木伐採
	悠久の鐘プレート		東屋周辺植栽

写真 32）未舗装の明神山参道（昭和 45 年）

写真 33）公園整備前の水神社（昭和 40 年頃）

写真 34）コンクリート舗装された明神山参道

写真 35）住宅地内の参道鳥居

写真 36）公園内に整備された水神社

写真 37）悠久の鐘

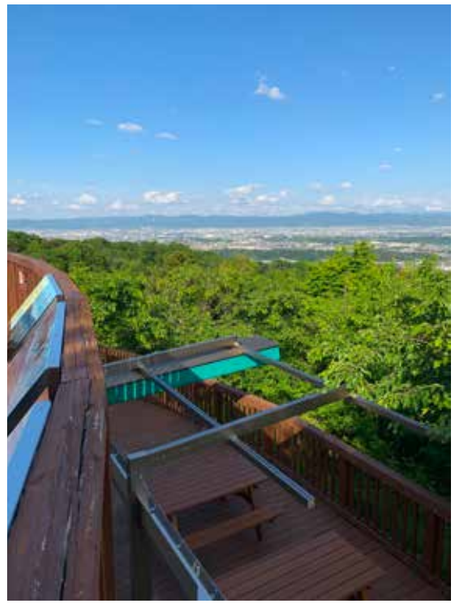


写真 38）展望デッキと桟敷デッキ

第２節　文化財としての取り組み

名勝地としての明神山は、①山地や盆地・平野・海などが織りなす自然的営為の国土美が展望できること、②少なくとも江戸時代後期から明神山が展望地点となってそれらが観賞されてきた歴史をもつこと、③その観賞は、信仰や生活をめぐって山と人が関わってきたことで確立されてきたことの３つから構成されると整理した。このうち③に関しては、送迎太神宮の遺品や八朔の農耕祭祀などがそれぞれ有形、無形民俗としての文化財の性格も有しており、それら個々の文化財に対しては、明神山自然の森公園内に送迎太神宮を中心にした明神山の歴史、それに葛城修験第 28 番経塚としての水神社の解説板を設けて活用している。

解説板

また、王寺町では、平成 31 年（2019）４月の文化財保護法の改正によって市町村で作成できることとなった文化財保存活用地域計画を早々に作成し、令和元年（2019）７月には『王寺町文化財保存活用地域計画』が文化庁長官から認定された [40]。そこでは、文化財の定義を、未指定のものはもちろん、文化財保護法の６類型におさまらないものも含めて、地域の人々が守り伝えたいと考える物（モノ）・事（コト）・所（トコロ）のすべてに広げて計画をとりまとめ、明神山については、飛鳥時代に開かれたとされる修験の道や江戸時代の送迎太神宮、現代の水神社など信仰を集める山であること、江戸時代から眺望に優れる山として知られていることに加え、山頂から見える歴史建造物や歴史的構築物から時の流れが歴史絵巻のように感じられるのを「歴史眺望」と称して、このことにも文化財としての価値を見出している。そして、明神山に関わる保存と活用に関する措置として「明神山の文化財指定」「明神山歴史年表の作成」「明神山での狼煙体感イベント」「明神山広域観光ルート整備」「明神山山頂・参道整備」「明神山からの眺望バーチャル・リアリティー」の６つを計画した。

王寺町文化財保存活用地域計画

歴史眺望

明神山の保存と活用の措置

これらのなかで、広域観光ルート整備、山頂・参道整備については、観光・建設部署によって実施済みで、明神山からの眺望 VR については、文化庁補助事業によって、ブラウザ上で 360 度の眺望を解説するもの [41]、VR ゴーグルによって歴史眺望の意義が理解できるものを制作している。また、狼煙体感イベントについても、文化庁補助事業によって令和４年度に、奈良県補助事業によって令和５年度に実施してきた。明神山は、飛鳥と明石海峡の双方が望め、飛鳥時代の烽火台があったと考えてもおかしくない立地であることから計画し、令和４年度には烽火（のろし）がどの程度の距離まで見えるのかをサイトへの写真投稿で住民とともにつくる MAP プロジェクト、令和５年度には烽火を明神山から葛城、明日香へとリレーするプロジェクトを実施している。令和５年度には、奈良県立王寺工業高等学校の生徒が烽火上げに使用するロケットストーブを製作した。山頂には、明神山からは旧国名で 10 国が眺望できることから、明神山からの展望を「十国国見台」と命名した解説板も設置している。

明神山からの眺望 VR

烽火プロジェクト

十国国見台

なお、明神山の歴史眺望についてもう少し付け加えておくならば、奈良盆地、生駒・金剛山地、大阪平野・大阪湾などの地形に、例えば、歴史的事象であるオオヤマト古墳群、百舌鳥・古市古墳群、法隆寺、平城京・東大寺・興福寺、吉野大峯の山々などの立地を重ね合わせることで、なぜ奈良盆地（ヤマト）の地に我が国の政治的中枢が誕生したのかなどをうかがい知ることができる。こうした眺望を「歴史眺望」と呼んで、景観の保全と眺望の活用を図ろうとしている。

(40)　認定された地域計画は、王寺町公式サイトで公開している（https://www.town.oji.nara.jp/kakuka/chiikiseibi/chiikikoryu/information/3464.html）。
(41)　王寺町公式サイトで「明神山からタイムスリップ世界遺産トラベル」と題して公開している（https://www.town.oji.nara.jp/myojinVR/）。

写真 39）２市２町（大阪府柏原市、奈良県香芝市、三郷町、王寺町）広域ウォーキングマップ

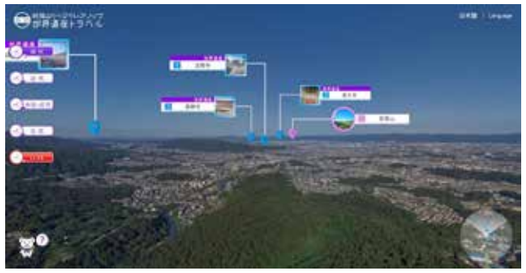


写真 40）ブラウザで楽しむ明神山 VR

写真 41）明神山 VR ゴーグル

写真 42）烽火台を製作した高校生

写真 43）明神山から上げた烽火（令和４年度）

第３節　名勝地としての価値

国土美と展望する名所

最後に明神山の名勝地としての価値をまとめておきたい。先にもまとめたように、名勝地としての明神山は、まずもって生駒・金剛山地や大峰山脈、奈良盆地、大阪平野、大阪湾、明石海峡などが織りなす自然的営為の国土美が展望できること、そして、少なくとも江戸時代後期には展望地点となり、そうした国土美が明神山から展望可能な名所と位置づけられて、各地からの参詣者に観賞されてきた歴史をもっていることがあげられる。その観賞は、明神山が古墳石材の採取地、葛城修験の巡拝路、水神信仰や伊勢信仰の拠点、薪や下草、松茸を採取する山として人々と関わってきたことで現在にまで引き継がれ、展望地点として保全されてきた。

展望地点として保全

展望地点の保全という点では、明神山自然の森公園の整備も重要で、このことをつうじて展望デッキや景観解説パネル、望遠鏡などが備わって容易に観賞できるようになった。その過程では、住宅地開発によって明神山参道の一部が失われたが、それを残すために畠田の人々が開発業者に働きかけ、参道がコンクリート舗装されたことで訪れやすくなり、かえって展望地点の価値は高まったといえる。さらに近年、展望地点としての機能を高めるために公園が再整備され、同時に周辺樹木の剪定も定期的に行うことで眺望が確保されている。

以上のように、明神山は、山地や盆地、平野、島、海峡などの自然的営為が展望できるところであり、江戸時代後期から、あるいはそれよりも早くからそれらが観賞されてきたところに名勝地としての価値がある。また、観賞されてきた展望地点は、修験や水、伊勢の信仰地として人々が集い、形成されてきたことも見逃せない。現代においては、公園の機能も加わって人々が集っている。

保存・活用の範囲

したがって、名勝地として保存・活用する範囲としては、人々が集い、展望地点となっている明神山自然の森公園と同じ王寺町大字畠田 2638 番、2639 番、2640 番、2641 番、2642 番、2643 番 2644 番、2645 番、2646 番の 9 筆の合計 9,659.00㎡とし、近代以降の山名である明神山を基本に、聖徳太子の地名伝承や送迎太神宮、松茸狩りのチラシなどで歴史的な地名・山名であった送迎山を補った「明神山（送迎山）」と称して国登録記念物（名勝地関係）に登録されることが適当であると考える。明神山（送迎山）は、登録記念物登録基準における名勝地関係第 3 号の再現することで容易でないものに該当すると思量される。

新たな観賞のあり方

なお、先にも触れたが、王寺町では明神山からの歴史眺望として新たな観賞のあり方を提示している。歴史眺望とは、オオヤマト古墳群や飛鳥の都、藤原京、平城京が奈良盆地内につくられたことや、百舌鳥・古市古墳群がヤマトの盆地から大和川水系に沿って生駒・金剛山地を越えた海辺につくられたこと、あるいは聖徳太子の斑鳩宮や法隆寺が大和川にほど近いところで、生駒・金剛山地をつうじたヤマトへの出入口にあたる部分につくられたことなどを、その立地や地形なども合わせて明神山から観賞することで、その歴史的背景が歴史地理的にうかがい知れるというものである。つまり、歴史眺望は、自然的な営為によってかたちづくられた国土美に、人文的な歴史を重ねて観賞するあり方で、こうした視覚は、学問的成果を積み重ねた現代だからこそ可能となる。今後は、歴史眺望も明神山の名勝地の構成要素として価値を高めていくものであることを付け加えておきたい。歴史眺望も含めて、名勝地としての明神山を一体的に保存・活用することが望まれる。

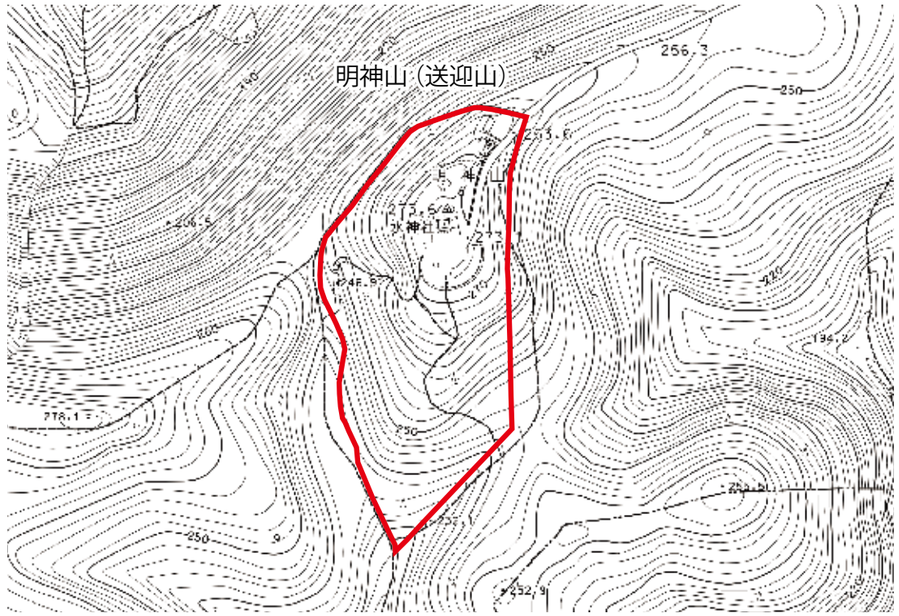


図 10）名勝地として保存・活用を図る範囲案（令和２年測図 1/2,500「王寺町都市計画図」を 80%に縮小して作成）

写真 44）明神山から法隆寺を望む（北東方面）

写真 45）明神山から仁徳天皇陵古墳を望む（西方面）

写真 46）明神山から履中天皇陵古墳を望む（西方面）

写真 47）明神山から生駒山地・矢田丘陵方面を望む（北東方面）

写真 48）明神山から大阪平野・大阪湾方面を望む（西方面）

写真 49）明神山から見た明石海峡大橋（西方面）　＊王寺町観光協会提供井上徳博氏撮影

写真 50）明神山から見た雲海に包まれる奈良盆地（東方面）　＊松本直己氏提供

明神山名勝調査報告書

編著：王寺町地域交流課文化資源活用係
発行：王寺町
2024.8.8.